

巻 頭 言

お役所仕事でない親身な医療を

院長 赤坂嘉宣

病む方、その家族の方と付き合う我々は、特に誤解のないように一生懸命お話を聞く必要がある。専門職として知っている限り最善の方法をお教えし、間違えのない選択をして頂く義務がある。その事の労を厭ってはならない。また、病に際してそれ以外の事態が出来る事があるが、これにも誠心誠意対処したいものである。

改正される前の刑法での、殺人が時効になる2倍くらいの年数のかなり以前の公立病院勤務時代の体験であるが、膵臓癌で亡くなった男性の奥さんから、亡くなるまで看病して付き添いしていたことの証明を執拗に求められた。経験少ない時代の事ゆえそういう書類があるのかどうかも、書式も何も分からず、事務に相談すると、「病院として出せない」と言われ、「出すなら勝手に出せばいい、責任は自分で取れ」と病院を首にされそうな勢いであった。理由がはっきり理解できないまま、出しにくい旨を伝えたが、必死でどうしてもと納得せず、回診中はおろか手術中にも押しかけて来られ、未亡人とはいえ相手は30以上も年上、正直閉口した事があった。病院の意向を受けて病棟の婦長も断っており、事務は全く受け付けなばかりか、下手な税金逃れなんかするから自業自得だとすら宣うた。

しかし、悪行の限りを尽くしてためた巨額の蓄財を脱税するわけではないのは一目でわかることで、後で知った事だが、何かの加減で保証人になって、夫婦二人で細々と続けてきた店を借金を負って失い、奥さんにその上の負債を負わせないための苦肉の策で、事実上は仲良く一緒に暮らしてこられたものである。

意を決して税務署だったか福祉関係のお役所であったか、電話を入れ、病院の証明でなければだめなのか尋ねたところ、何のことはない、担当官はあっけらかんと大家さんでも、町内会長さんでも事情を知る人ならだれでもいいという。奥さんは「たとえば病院の・・・」と言われた事を金科玉条と考えたもので、こんな善人に脱税なんかできるはずもなく、ただただ御主人に付き従って人生を送ってきたおとなしい方、以外であろうはずがない。

今思っても私の人生にかなりのインパクトを与えた出来事で、多分お役人は簡単にもらえ最も信頼に足るものとして、簡単に大した配慮も無く病院の証明と言ったのであろうが、建前上完全看護を掲げている公立病院としては出しがたい証明書で、しかし奥さんはそれでなければ絶対にいけないと理解した。身内の、それも生涯の伴侶の最後にあたって付き添わない、看病しない妻があろうか。皮肉な見方をすれば、かたくなな病院の仕打ちはこの奥さんは御主人の最後に付き添わない薄情な妻という事を言うに等しいのではないか。「この方は誰か知らないが、なぜか知らないが、何をしていたか分からないが、頻回に、ほとんど毎日患者さんの傍にいた（看護はしていなかった）」とでも書くことを思いつかなかった事が残念である。

役所と奥さんの間にまだまだ会話が成り立つはずなのに説明が少ない。証明書の要求に公的な立場上突っぱねた病院事務並びに婦長。私も全く嘘でもないが多忙を理由に避けたが、避けきれなかった。奥さんほうかつであるが、他の4者は4様に道義上責任があるというべきであろう。

証明は隣の奥さんでもいい旨伝え、これで奥さんの通院は終わったが、そういえば昔の事でくだんの奥さんからも事務からも婦長からも何かの挨拶があったという記憶が無い。これじゃあ、はやりの「昔は良かった、今どきの人間は」などと言えなくなるが、とにかく患者さんの話をよく伺おう。そうすればKKR札幌医療センターはもっと良い病院になれる。